

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター Newsletter

## 多言語・多文化 教育研究

Multilingual Multicultural Education and Research

URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>

特集

## 協働・実践・研究が生み出すダイナミズム

第1回多文化協働実践研究・全国フォーラム盛大に開催!



全体会・パネルディスカッション

2007年12月1日（土）～2日（日）に行われた初の多文化協働実践研究・全国フォーラムには、「多文化社会の課題に迫る！」のテーマのもと、北は北海道から南は九州まで全国の実践者・研究者327名が集いました。（2日間の内容は3ページ表1参照）

2年間をサイクルとした協働実践研究のプログラムの中で、1年目となる今年の全国フォーラムは中間報告的な意味合いもあり、まとまった成果を発表するというよりも、むしろ各班の課題意識を提示し、全国の実践者・研究者が一堂に会することにそのねらいがありました。

本センターでは、「現場と研究の乖離をどう埋めていくのか」との問題意識のもと、2006年9月から教育、言語、経済、労働、法律、精神医療など、多分野の専門家および現場の実践者に本学特任研究員を委嘱し、「協働実践研究プログラム」を展開しています。

5回にわたって研究の柱を抽出した後、テーマ別に5つの研究班に分かれて、それぞれが協働する地域の方々との意見交換やフィールド調査、また、先行研究

の洗い出しや先進事例研究などを行ってきました。その中で、昨年には全国フォーラムに連動させたテーマ設定のもと、班別プレフォーラムも開催しました（詳細は5ページ表2参照）。

この「協働実践研究プログラム」の特徴は、多文化社会における課題解決の道筋をつけていける方法として、多様な人々との「協働」を重視していることです。実践研究における「協働のプロセス」を明らかにしていくため、全国フォーラム冒頭の全体会では、各班の研究テーマと活動の進捗状況報告を、また2日目の最後の全体会では、10名の特任研究員全員が登壇し、「多言語・多文化社会にむけて協働・実践・研究が生み出すダイナミズム—協働実践研究、はじめの一步」と題してパネルディスカッションを行いました。

本号では、この時に語られた特任研究員の「思い」を中心に、今後の「協働実践研究」活動を展望します。

## No.6

2008(平成20)年1月

## CONTENTS

- P.2…【研究】「思い」を根拠にした活動こそ現場に響く!
- P.6…【教育】多文化コミュニティ教育支援室の活動
- P.7…【社会連携】高校生のための国際理解セミナー



受付の様子

# 【研究】「思い」を根底にした活動こそ現場に響く!

## ＝第1回多文化協働実践研究・全国フォーラム＝

「全体会のパネルディスカッションが面白かったです。多言語多文化の課題自体にももちろん興味があるのですが、それを現場に関わるいろんな人がどうとらえて研究していくか興味があったからです。研究のメンバーの方々の人間性や研究への思いをお聞きして最終的な『可能性』や『ベクトル』のようなものがそこにあるような気がしました。携わる人間の『思い』（もちろん思いだけでは研究にも実践にもなりません）が根底にある活動こそが、現地の人間や子どもたちに届きうると思います」。

全国フォーラムのアンケートにこう記してくれた人がいました。「協働」とは人と人とのつながりから生まれるものであり、そして「協働」は活動のプロセスの中にこそ存在するものであるならば、まずは10名の特任研究員がどんな「思い」でこの活動に参加したのかを明らかにしておくことは重要なことといえます。

全国フォーラム2日目の全体会で各特任研究員が話したことから、その一端を紹介します。

### ●課題生成型研究を当事者の視点で (佐藤・金班)



(左から佐藤さん、金さん)

**佐藤郡衛:**

私は、特に外国籍の子どもの問題をずっと扱っているの

ですが、やはり教育だけでは解決しない。ほかの問題も一緒に考えなければいけないと痛切に感じています。川崎市ふれあい館を中心にして、川崎の先生方、教育委員会、行政の力というものを借りながら、単に組織間の連携ではなく、個人として当事者の側からこの子どものために何をしていけるのか。そこを考えてみたい。

もう1つは、地域の側からも考えてみたい。佐藤・金班の試みの中で面白いのは、フィリピンにつながる、支援してもらっている高校生がふれあい館に来ている小学生、中学生を支援するというような関係もできつつあることです。難しいかもしれませんが、そういう子どもたちをどうサポートしていけるか。その中で私に何ができるのか、私自身の立場性が問われている、その辺のところがかついてもありますけどね。

私自身は「課題生成型研究」と呼んでいます。研究は仮説をつくったり、仮説を検証しますが、我々が今やろうとしていることは課題を共有して、その課題をどうやって解決していくのか。そこに実践研究そのものの方向性があるのではないかと思います。ですから、そういう

ことを自分自身の問題としてもとらえながら、そのためにいろいろな人とつながりを持たなければいけません。まさに当事者性の視点からの連携の在り方というものを、ぜひこれから考えていきたいと思っています。(東京学芸大学国際教育センター教授)

**金迅野:** 大事にしたいと思っているのは、学習サポートを通してのニューカマーの子たちの力付けということです。

川崎の南部ではフィリピンから来た子どもが増えてきていますが、中学校の学習サポートを経て、高校に入って、生き方を模索している子がいます。

よく言われることですが、いわゆるニューカマーの外国人の子たちの中には、高校に入るけれども、ドロップアウトしてしまう子が多い。その姿はかつての「在日コリアン」のそれと重なるところがあります。生き方の選択肢が狭い。いわばハンドルに遊びがない感じです。

カテゴリーからこぼれ落ちてしまう「存在の地の部分」に敏感でありたい。これは日本人でもとても大事なことだと思います。国民なんて言われて、やったーと、にこっとかする存在って味が悪いじゃないですか。カテゴリーからこぼれ落ちたものの連なりから、何かを新しくつくるといような働きを「ニューカマー」の子たちとしたいと思っています。(川崎市ふれあい館職員)

### ●県境をも越えた連携協働を (渡戸・関班)

**渡戸一郎:** 多文化・多言語化に対する自治体の政策は優先順位が必ずしも高くない。私は下からいろいろな取り組みが提案されたり、あるいは実現していくこと

が重要な時期になっていると思います。

今回、相模原と町田の連携ということですが、地域は中長期的な見通しで評価なり、認識をしていかなければいけない







(左から渡戸さん、関さん)

と思います  
が、同時に  
即応しなけ  
ればいけな  
い課題も常  
にあります。  
そういう意  
味では、佐藤・金班から出た、「課題生成型研究」というのが問われます。そういった課題を解決するときに、中間支援組織(インターメディアリー)として、国際交流協会や国際ラウンジとかがあります。そこでコーディネーターの役割が非常に大事ですが、それについては、山

西・小山班でやっています。お互いの班の観点やリソースをやりとりしながらやってきているのがまさにこの協働実践研究プログラムの面白いところで、そういう意味では、各班とも連携しつつ、また地域ともうまい形で連携協働して、新しいものが1つでも生まれればという願いでやっています。(明星大学教授)

**関聡介:** 私のテーマは外国人相談ですが、外国人の方の抱えている問題というのは、阿部さんが関わられているところの問題から、典型的な入管の在留資格の問題まで、単一の専門家では解決できない複雑な問題が多く、加えて通訳を入れる必要

もあることから、多分野の専門家の協働が不可欠になってきます。

さらに、そういうサービスというのは地域的にはかなり偏在をしているので、地域的な連携関係がもともと求められる分野だと言うことができます。

したがって、「協働」の切り口としてこの外国人相談というものを見ていくことは、協働実践研究として、比較的必然性があると感じております。では、いったいどういう体制でどういうサービスを提供したらいいのか、その答えもぜひ相模原、町田地域でのいろいろな実践の中で見つけていきたいと思っています。(弁護士)



●市民としての議論を深めたい

**大木和弘:** 僕はかなり古くから市民ボランティアと一緒に相談会をやっているの  
で、市民に向けて、お話をさせていただく機会が多かったです。その時々準備した断片を1つにまとめる作業を今、ぼつぼつと1人でやっています。

たとえば、日本人と外国人のカップルの婚姻の成立や離婚については、夫婦の一方が日本に住所を有する日本人であれば日本法適用ということで、特別扱いがあります。これは、日本の民法で離婚を扱えるため、外国法を調べないで済みますからとても便利です。でも、考えてみるとそれは変です。不公平な取り扱いで、何でそうになっているのか理由を調べてみると、戸籍制度の問題に行く。つまり、夫婦の一方が日本人だと日本での結婚、離婚は戸籍の届出でするしかないということにしているわけです。そんなことが分かってきます。

そういう観点で、少し批判的にこれまで話してきたことをまとめていく中で、市民の皆さんとの議論のネタをつくって、問題意識を共有していきたいと考えています。(弁護士)

表1【第1回・全国フォーラム】実績

参加総数：327名 東京外国語大学研究講義棟

セッション	テーマ	参加人数(約)
12月1日		
全体会	班別・研究テーマと活動状況報告及び分科会内容紹介	200
分科会A-1	日系ブラジル人の適応・定住化と人材育成への展望—	150
阿部・井上班	長野県上田市の調査から見えてきたもの	
分科会A-2	なぜ教材開発プロジェクトを行うのか?	110
分科会B-3	自治体及び国際交流協会職員に求められるコーディネーターとしての専門性—現場の実践から—	140
山西・小山班		
分科会B-4	地域の特性を生かした日本語プログラムづくりとは? —各地の日本語教室の実践から—	120
野山班		
懇親会	ネットワーキング	120
12月2日		
分科会C-5	自治体の外国人政策と区域を越えた行政・市民連携の可能性	90
渡戸・関班		
分科会C-6	外国につながる子どもたちの教育を地域から育む試み—地域、学校、行政、当事者の協働実践研究モデル構築を目指して—	130
佐藤・金班		
発表セッション	グループ発表：7グループ、個人発表：5 (教材開発プロジェクト意見交換会同時開催)	
全体会	多言語・多文化社会にむけて協働・実践・研究が生み出すダイナミズム—協働実践研究、はじめの一步—	170

●多様な人々との連携モデルを

(阿部・井上班)



(左から阿部さん、井上さん)

**阿部裕:** 私は、ずっと日系人の患者さんを診ています。ここ6~7年は、第2世代の子どもさんたちが受診するようになってきました。でも、実際に診てみると、お母さんが不安なだけとか、学校でうまくいかないけれどもそれは決して精神的な問題ではないという子どもが見られました。家族や地域の問題、または教育の問題として、予防的な意味でこころの問題を食い止められる方法があるのではないかというこ

とで、この研究会に参加させていただいて

います。  
僕は、ずっと実践をやっていますが、今回は、日系人の第2世代の子どもたちのためにエビデンスを取りながら、いったいどういう支援と連携ができるのかということ、この研究の中でやっていきたいと思えます。しかし、これは決して精神医学の分野だけではできません。我々としては上田に通って、何か具体的な実践をぜひやりたい。その中で教育とか教材とか、コーディネーターとか、そういうところから心の問題に少しずつ踏み込んでいただけるような、何かそういう仕掛けを一緒にやりたいと思っています。

(精神科医)

**井上洋:** 私自身は公共政策の研究をベースに、企業のいろいろな要望を聞いて、霞ヶ関や永田町に提言しているという仕事をしていますが、大手町、丸の内、霞ヶ関、永田町の人たちといくら議論しても、価値観が同じになってしまい、なかなか新しい発想が出ないだろうと常々思っていました。また、2004年に外国人受入れに関する提言を書きましたが、その責任として、書いたことを実現するまではある程度見届けなければいけない。

そういう思いで、今、上田市のみなさんと一緒にやっていますが、心の問題を扱う阿部さんと市場のメカニズムを分析



している私と労働や社会制度の研究をしている日系人のウラノさんの全く違う分野の3者が、牽制しあいながら、なかなか

興味深い結果が出てきています。

また、今回、相当深くそれぞれの班の議論を聞かせていただきましたので、そ

れも何とか上田のプログラムの活かしていきたいと思っています。(日本経団連産業第一本部長)

● **選択の自由がある社会をつくりたい** (野山班)



**野山広**：以前に文化庁で日本語教育調査官(専門職)をやっていた関係で、ここでは地域の日本語教育の問題にかかわることになりました。野山班では、地域の特性を生かした日本語プログラム作りをしています。人のつながりというのは協働実践研究の基本形だと

思います。つながったものが必ず何らかの形で社会につながって、影響を与えていくことを身にしみている状況です。

私は長崎県の西の端の五島列島で生まれたのですが、10代の後半に島から出ることで、自身のアイデンティティーが大きくゆらいだことがありました。おそらく似たような感情を海外から来た子どもたちも持っているはずで、こうした子ども

もたちに何ができるのかということを考えてきました。そんな時に出会ったのがスウェーデンの移民政策で、特に「選択の自由」という言葉に引かれました。この選択の自由が与えられるような社会をつくっていきたい。私は日本語プログラムのことをやっているわけですが、並行して考えているのはそういう基本的な政策のことです。(国立国語研究所整備普及グループ長)

● **コーディネーターは根底にある共通テーマ** (山西・小山班)



(左から小山さん、山西さん)

**小山紳一郎**：最近、政策研究というのが研究者の間でもやはりです。僕自身も政策提言

するという中に、かなりの部分身を置いています。

本班では、多文化ソーシャルワーカー養成のカリキュラムづくりをしています。昨日、その予備調査のために会った日系ペルー人の方から、「小山さん、情報とか言葉というのはぬくもりのある人間関係の中からしか伝わらないんですよ」と言われて、愕然としました。僕自体が理屈でものを考えようという身体になっていたのです。政策よりもまず「思い」からスタートするということが重要なのでは

ないかと思いました。

「多文化ソーシャルワーカー養成、大いに結構です。でも、小山さん、飯は食えるんですか」とよく聞かれます。僕に、その答えは分かりません。けれどもぜひみなさんの知恵を貸してください。いろいろなりソースを組み合わせ、何とか飯の食える制度にしたい。(かながわ国際交流財団情報サービス課長)

**山西優二**：この活動に参加して思うのは、1つは人間が面白いこと。いろいろなつながりの中で多様な人たちが集まって、何が生まれてくるのか楽しみなことです。

もう1つは、この協働実践研究は、研究のための研究や、収奪型の研究はしない。実践と研究を一体化した実践研究をしっかりやるんだと。それならば参加しても面白いだろうなということがありました。

今、多くの教育が非常に上滑りしています。本来人間というのは、生活課題の中で

いろいろな学びをつくり出していくわけですが、その生活と学びと教育が連動していないのです。ですから、こういう協働実践研究が生み出すある種のダイナミズムを教育の中に、どうかさびとして取り入れていけるのかという思いがあります。

私たちの研究班は、多文化に見るプログラムコーディネーター、ソーシャルワーカーの専門性研究、さらにはそのプログラムづくりというところで、少しずつ進めていこうと考えていますが、コーディネーターとかソーシャルワーカーというのは、すべての班の根底にある共通テーマであって、各班から参加されている皆さんからもメッセージが投げやすいと思います。したがって、班内だけでなく班を越えた協働型研究という形になっていくことを期待しています。(早稲田大学教授)





## ●協働実践研究の一つの成果—コーディネーター養成プログラム

協働実践研究プログラムは、多分野の専門家が出会い議論する場を設定し、課題を複眼的に捉える中で協働を促しながら、さらに新たな活動を創造していくという螺旋型の活動を想定していますが、こうした活動を推進するためには、コーディネーターが必要です。

多言語・多文化社会における、複雑・多様化する課題を解決するためには、多様な機関・人々のより一層の「協働」が

求められており、その推進役としてコーディネーターの養成は急務の課題となってきました。

本センターでは、この夏、文部科学省委託事業「多言語・多文化社会に求められる新たな職種としてのコーディネーター養成プログラム」をスタートさせます。ここには、「協働実践研究プログラム」の各研究班の活動の成果を反映させるため5つの班から各1名の特任研究員が評価

委員として参加しています。そうした意味では、この協働実践研究自体が多言語・多文化社会の課題解決にむけた一つの実践を生み出しているともいえます。

第2回となる次回の全国フォーラムでは、「協働実践研究プログラム」の新たな試みとして、コーディネーター養成プログラムの実践報告ができればと考えています。

## ●シリーズ本の発行

この10名の特任研究員を中心とした班別活動は2009年3月まで続きます。最終成果は本にまとめる予定ですが、その前に「協働」がどのように行われたか、その「プロセス」を記録するため、「シリーズ

多言語・多文化協働実践研究」を発行していきます。年度ごとにプレフォーラムおよび全国フォーラムの分科会での議論の内容を、班別テーマに沿って編集し、冊子にまとめていきます。今年度は、第

1回全国フォーラムの1日目と2日目に開催された全体会の内容をまとめたものを含めて全6冊を発行する予定です。発行情報は、本センターホームページに掲載していきますのでご一読ください。

表2【班別プレフォーラム(全5回)】実績 参加総数：326名

班名	テーマ	開催日時&場所	参加人数
佐藤・金班 	「楽・ふれあい・トーク」—目の前の外国につながる子どもたちに、わたしたちができることを—	10月12日 神奈川県川崎市 ふれあい館	67
山西・小山班 	多言語・多文化社会の広がり とコーディネーター —福祉、学校教育、日本語支援、国際協力の現場から—	10月26日 早稲田大学国際 会議場	89
阿部・井上班 	外国人住民を取り巻く課題と 地域づくり—長野県上田市に おける行政・企業・市民連携 の取り組み事例を中心に—	11月2日 文京シビックホ ール	80
渡戸・関班 	地方自治体の外国人施策にお ける市民協働の可能性を探る —町田・相模原における広域 連携の模索—	11月7日 町田市民フォー ラム	47
野山班 	共生のまちづくりに向けた地 域日本語プログラムづくり— 「のしろ日本語学習会」の実践 から—	11月17日 本学留学生日本 語教育センター	43

## ★全国フォーラム(第1回) 抄録をさしあげます。

全国フォーラムでは、2日間を通して2つの全体会、6つの分科会、9つの発表セッションが行われました。その全ての要旨が収録された、当日配布用の抄録(全95ページ)の残部をご希望の方に差し上げます。(※数に限りがありますので配布部数はお一人1冊とさせていただきます。)



以下、いずれかの方法でセンター「全国フォーラム抄録」係までお申し込みください。(宛先はP.8をご覧ください)

### 1) 郵便

返信用封筒(A4用)に返信用の切手を貼り同封の上、住所・氏名を明記し、封書でお申し込みください。

※返信用切手・・・390円

### 2) 宅配着払い

住所・氏名・電話番号を明記し、メールまたはFAXでお申し込みください。

※宅配着払い料金等の詳細につきましては、本センターホームページをご覧ください。

# 多文化コミュニティ教育支援室の活動



ポルトガル語で算数をどう教える？

## ◆語学を活かした学習支援

### 「外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」講座を開催

本センターの一部門である多文化コミュニティ教育支援室（以下、支援室）では、「多言語・多文化共生学講座」として「外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」を2005年度から開催しています。2007年に本センターに支援室が統合されてからは、「国際理解教育入門」（前号で紹介）が新しく加わり「多言語・多文化共生学講座」は年2回の開催となりました。今年度の「外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」は、9月24日（月）～28日（金）に開催され、26名の学生が参加しました。外国につながる子どもたちを一人の人間としてとらえる視点を持ち、学校の先生と連携して日本語や教科の指導を行うことを目指した本講座の特徴は、学生が専攻する外国語を媒介語として生かせるよう全6言語（英語・スペイン語・

ポルトガル語・ドイツ語・中国語・日本語）組み込まれていることです。「外国人児童生徒に外国語で算数を教える」という状況を設定した上で、実際にやってみる講座は子どもたちが外国語で学ぶことの困難さを実感させるものになっています。

講座を受講後、4名の学生が、府国際交流サロン、川崎市ふれあい館で学習支援活動を始めました。

## フィリピンから来た中3の女子と活動！

つ の ま さ こ  
築野真紗子さん（ドイツ語学科 1年）

「日本に住む外国人」と聞いても、今までは漠然としたイメージしか持っていませんでした。共生学講座を通じて興味が湧き、「まずは参加してみよう」と川崎市ふれあい館での学習ボランティアに参加しました。私はフィリピンから来た中3の女の子の数学を担当しました。共生学講座で教えて頂いた、「外国につながるを持つ子どもたちに、対等な立場で接する姿勢」を心がけたことで、生徒の方から話しかけてくれるようになり話が弾むようになったのが嬉しかったです。



## ◆お姉さん、お兄さんと「理想の学校」を考えてみよう！—川崎市立宮内中学校での実践

昨年9月から10月にかけて、学生ボランティア6名（うち、中国人留学生2名）が1グループになって、川崎市立宮内中学校で、3回にわたって国際理解教育の実践を行いました（内容は下表参照）。

今回、学校側から提示されたテーマは「理想の学校」。対象は、中学1年生から3年生まで32人、総合的な学習の時間に、「国際理解」を選択した子どもたちです。世界各国の学校の様子をビデオや写真、留学生の体験談から学び、日本の学校と比較しながら、「理想の学校」について考えました。他の国の学校を見ることで、自分の学校について改めて考える機会になったようです。

小・中学生にとって、お姉さん、お兄さんのような存在の大学生・留学生と過ごす時間は、普段の授業とはちがって、いつも以上にのびのびと「自分」を表現できる場になることがあります。大学生・留学生は、子どもたちに「教える」のではなく、子どもたちのありのままの気持ちや意見を引き出し、その学びを「応援する」存在になることができます。

学生ボランティアの実践が、学校現場に新しい国際理解教育のスタイルを提案することにつながればと考えています。



## 全3回の内容

### 第1回 外国の学校と日本の学校の違いを知る、考える

- 1 アイス・ブレイキング(フィリピンの遊び「家、ぶた、嵐」を体験)
- 2 シンガポールの学校(ビデオ上映)
- 3 オーストラリアの学校(ビデオ上映)
- 4 外国の学校と日本の学校の違いについてディスカッション
- 5 感想文を書く

### 第2回 いろいろな国の学校の違いを知る、体験談を聞く

- 1 アイス・ブレイキング(3人の大学生(留学生を含む)に関するクイズ)
- 2 前回の授業のふりかえり
- 3 いろいろな国の学校を見る(写真を使って)
- 4 中国出身の男子学生、周さんのお話(中国の小中学校について)
- 5 感想文を書く

### 第3回 わかったこと、考えたことを整理して、発表する

- 1 グループ作業  
(オーストラリア、中国、日本の学校を比較して、3つの国の学校の「特色」とその「理由」を模造紙にまとめる)
- 2 発表

想像できないことが実現(!?)している学校があったりして、世界は広いなと思いました。国はいろいろあって、学校もいろいろだけど、自分たちの通っている学校がすべてではないので、『ここ変ー!』『この学校おかしいー!』とは、自分のはんだんで言えないんだと思いました。私たちの学校も他の国から見れば『ちょっと変』だからです。

今までは、理由もなく『学校が嫌だ』などと不満を言っていたけれど、中国の学校の話を知って、日本の学校にしても良いところがたくさんあるのだということに気づきました。本当は勉強が嫌でやりたくないと思うけれど、実際に学校が無くなってしまったら、困るのは自分なんだろうなあ…と思いました。どの国の学校にも良いところと悪いところがあると思うので、両方を比べて学校が良くなっていったらいいなと思います。

(宮内中学校の生徒の感想から)



自分の頭で考え、伝えることにチャレンジした3日間

# 「グローバル 高校生のための国際理解セミナー」

本学で初めての高校生向けのセミナーが2007年の暮れも押し迫った12月25日～27日の3日間、留学生日本語教育センターで実施されました。これは「東京外国語大学オープンアカデミー」の一環として実施されたもので、企画と運営を、本センターが担当し、多文化コミュニティ教育支援室で活動する大学生もボランティア・スタッフとして関わりました。

セミナーでは、高校生に、世界のさまざまな課題について考えるきっかけを提供し、文化や国際問題に対する感性とコミュニケーション能力を高めてもらうことをねらいとしたところ全国から24名が参加しました。3日間を通じて、高校生自らが考え、意見交換する「参加型」で進められ、最終日には、「近代化と豊かさ」「宗教」「戦争と平和」「多文化共生」の4つのテーマについて、グループに分かれて話し合った結果を発表し、高橋正明センター長らが講評を行いました。

参加した高校生たちは、単に知識を吸収するのではなく、「勉強と学問の違い」「参加型で学ぶことの意義」「自分の頭で考え、自分のことばで伝えること」「多文化共生」のような社会的なテーマが、自分にとってどのような意味を持つのか」などについて、他の参加者との議論や大学教員の講義を通じて、深く考え、新たな発見や感動を持ち帰ってくれたのではないかと思います。

現在、参加者の中の8人が編集委員となり、報告書の作成に取り組んでいます。今後本センターでは、今回のセミナーの結果を踏まえ、国際理解教育のさらなる可能性を探っていきたくと考えています。

もし、他の国にホームステイすることになったら？



みんなで考えよう「戦争と平和」



## プログラムの内容 (実施日：2007年12月25日(火)～27日(木))

1 日 目	13:00～13:30	開会式、オリエンテーション
	13:30～17:00	ワークショップ&レクチャー「異文化理解とコミュニケーション」 ファシリテーター：西あい(開発教育協会スタッフ) 講師：岡田昭人(本学外国語学部准教授)
	17:00～18:30	大学紹介、交流会(夕食)
	18:30～19:30	自由交流(希望者のみ)
2 日 目	09:00～12:30	ワークショップ&レクチャー「戦争と平和」 ファシリテーター：木下理仁(本学国際理解教育専門員) 講師：西谷 修(本学大学院地域文化研究科教授)
	12:30～13:30	昼食、キャンパス・ツアー
	13:30～17:00	ワークショップ&レクチャー「多文化共生」 ファシリテーター：西あい(開発教育協会スタッフ) 講師：塩原良和(本学外国語学部准教授)
	17:00～17:30	グループ討議準備(グループ分け)
	17:30～18:30	大学生(留学生を含む)との交流会(夕食)
	18:30～19:30	自由交流(希望者のみ)
3 日 目	09:00～11:30	グループ討議・発表
	11:30～12:00	講評・修了証書授与式
	12:00	終了・解散
	13:00～15:00	セミナー報告書編集会議(任意参加)

### ◆平田優衣さん

(神奈川県立外語短期大学附属高等学校2年)

ワークショップで、自分で考える時間があるので、その後のレクチャーでもただ「受け取る」だけでなく、考えをより深めていくことができました。

グループ討議では、同じことに興味を持つ仲間と少人数で意見交換でき、話し合うことによって生まれる更なる疑問に取り組んでいくという大切さを学ぶこともできました。お互いの意見によって引き出される意見がある、という発見をできたことも貴重な経験だったと感じます。



### ◆野間千晴さん

(お茶の水女子大学付属高等学校2年)

私はラテンアメリカという地域にとっても興味をもっていて、その地域について研究していきたいと考えています。その研究の中で「多文化共生」というテーマを大きく掲げ、南米のマイノリティ(特にインディオ)への偏見がありながらも多文化共生をしていくための道を探っていくのも面白い研究になりそうだなと思い始めました。今私に必要なのはまず大学受験に合格することですが、ぜひ「多文化共生」をテーマにした研究をしていきたいと思っています。そして何らかの形でだれかの為になる仕事につきたいです。



(参加した高校生の感想から)



# 地方自治体から見た外国人政策の現状と課題



2007年11月14日(水)に11月1日付けでセンター専任教員として着任したばかりの北脇保之教授が、「多言語・多文化講演会」の講師として講演をおこないました。北脇教授は1999年から2007年までの2期8年間にわたって浜松市長を務めており、「ニュー

カーマー」が集住する地方自治体の首長としてとってきた政策について話しました。平日の夕刻の開催でしたが、講演会には長友貴樹調布市長、石川良一稲城市長を含む62名の参加があり、1時間を超える講演に熱心に耳を傾けていました。引き続いて開催された懇親会にも27名の方が参加し、親睦を深めました。

浜松市は人口約82万人のうち約4%を日系ブラジル人を中心とする外国人住民が占めています。そのため、外国人住民の登録、居住、雇用、社会保障、教育等に関する様々な問題が生じてきました。北脇教授は、多文化共生の方針を市長として打ち出し、これらの問題に積極的に取り組む政策を推進するとともに、

同様の問題を抱える他の地方自治体に呼びかけて2001年に初めての外国人集住都市会議を開催。日本人住民と外国人住民の地域共生をめざす「浜松宣言」を発表しました。さらに、同会議では、地方自治体だけでは解決できない問題があるとして、外国人にかかわる教育、社会保障、登録等諸手続の3分野について国に対して具体的な政策提言をおこないました。

北脇教授は、多文化共生の前提として、私的空間での多文化性を保障する一方で、外国人の周辺化・底辺化を防ぐという意味で、外国人の社会への統合が必要であると述べています。こうした視点の背景には、国籍という区別ではなく住民全てと対峙して行政に取り組みなければならない地方自治体の特性があります。外国人集住都市会議の提言が公表されてからは、このような多文化共生の考え方は、政府の取り組みにも反映するようになりました。しかし、住民票の管轄省庁は総務省であるのに対して、外国人登録の管轄省庁は法務省であるといった縦割行政の現状の中で解決を要する問題は非常に多いといえます。本センターの専任教員として北脇教授の今後の活躍が期待されます。

## 多言語・多文化社会に必要とされる新たな職種としての コーディネーター養成プログラム

(文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」委託事業)

### 2008年夏新規開講!!

3月下旬頃より参加者の募集を開始します。(予定)

本センターでは、多言語・多文化社会に貢献できる人材として「コーディネーター」を養成するコースを8月から2月にかけて右表のとおり開講します。

### ■コース内容と対象者

「共通必修コース」を受講後、「専門別コース」として以下3つに分かれます。

- プログラムコーディネーターコース  
外国人受入施策に関わる企業・行政・国際交流協会の職員
- 学校教育コーディネーターコース  
外国人児童生徒の支援に携わる教員もしくは担当者
- 多文化コミュニティコーディネーターコース  
地域で日本語支援や外国人相談の活動を行っている市民団体の中心スタッフ

## プログラムの概要(予定)

	開講日程	内容
共通必修コース	2008年 8月 全5日間	現状把握と理論—講義と演習 (課題を分析するための視点として得ておくべき知識分野およびコーディネーターの基本的なスキルを学ぶ。)  (カリキュラム例) ①基調講演「多言語・多文化社会における人材像」 ②多言語・多文化社会概論(国内編・海外編) ③グローバル化とダイバーシティマネジメント ④国・自治体における法・政策・施策 ⑤国際福祉・国際教育・日本語教育 ⑥コミュニケーション論・メディアリテラシー・情報編集 ⑦ボランティア論・参加と協働・ネットワーク ⑧言語と文化(4言語程度)
	9月 全3日間	コース別演習 (課題解決に向けた理論と実践づくり)
専門別コース	10月～ 2009年 2月	各自現場での実践 (講師がモニタリングおよびアドバイスをを行う。)
	2月 全2日間	レポート提出  コース別プレゼンテーションと評価 評価: 評価の基準を満たす者には修了証を授与する。

\*日程・カリキュラム等に変更がある場合があります。詳細は追って当センターのホームページでご案内いたしますのでご覧ください。

## 第3期 センターフェロー(若干名 2月29日必着)

【研究】



「センターフェロー」制度は、国内外の新進研究者、および研究機関に所属しない実践者に、「センターフェロー」としての身分を保証することでその研究活動を支援するとともに、本センターの活動の活性化を目指すものです。非常勤・嘱託等の身分で研究機関に所属している方も応募できます。詳細はホームページの「募集要項」をご覧ください。

[http://www.tufts.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/2007/12/post\\_22.html](http://www.tufts.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/2007/12/post_22.html)

### ◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

記事の一つ一つを編集する中から、様々な世代の方々が多言語・多文化社会に関わっていることを実感しました。研究フォーラムを継続的に開催することで関心の裾野を広げ、コーディネーター養成プログラムで将来核となる人材を育成していくことで、多言語・多文化の輪をさらに広げていきたいと思っております。本年もよろしくお願いたします。(J)

発行 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター  
〒183-8534  
東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟319号室  
Tel 042-330-5441 Fax 042-330-5448  
E-mail tc@tufts.ac.jp  
URL <http://www.tufts.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>